

スポーツ界の人材育成

フクダハウジング株式会社 代表取締役社長 **木津 広美** VEL



「最近の若者は心が折れやすくメンタルが弱い」と言われる中、スポーツ界では10～20代前半の世界チャンピオンが日本から続々と生まれています。

なぜ、日本スポーツ界は世界トップレベルの若手育成ができていのでしょうか。しかも驚くべきことに、一部の選手は競技成績だけではなく、言葉遣いや礼儀作法、コミュニケーション能力も超一流。外国語で取材もスピーチもこなしますから、もはやその成長スピードは圧倒的と言わざるを得ません。

私も若い頃、バドミントンの実業団選手として世界トップを目指したものの、まったく歯が立たず現役を引退しました。では、当時と現在では何が違うのかという疑問を中心に、今回はスポーツ界の人材育成についてあれこれ書いてみたいと思います。

成功要因がいくつかある中で、私が1つ挙げるとすれば、「変わるべきは、指導する側から」という意識が浸透したことだと思います。2019年、日本スポーツ協会の主導により、コーチの意識改革と共にコーチが自ら学び続ける体制づくりが進められました。その内容は「プレーヤーズセンタード・コーチング」の概念がベースになっていますが、トレーニングは選手本位で行うことを基本とし、指導者は選手自らが学ぼうとする環境を整えることに注力して成長を促そう、というコーチングです。

私はVELを取得した翌年の1996年に、スポーツ指導と絡めて「VEの5原則で人生を変える」というエッセイを発表しました。当時の日本では年功序列の意識がまだまだ強く、選手はコーチや先輩の言うことには逆らえない時代でした。だからこそ、VEのメソッドを使ってスポーツ界に一石を投げたいと思ったのですが、あれから数十年の時を経て、ようやくVEの「使用者優先」的な考えが理解されてきたと思うと、実に感慨深いものがあります。

さらに、同じような言葉で「プレーヤーズアントラージュ」というものがあります。これはプレーヤーズセン

タードに対して、「選手の周りをどのような人々で構成するか」という概念で、これもVEの「チームデザイン」のような意味合いになります。

実際、選手がより高いパフォーマンスを発揮し続ける(=価値向上)には、従来の日本スタイルの指導者一人体制では限界がありました。新しい時代の指導責任者は、トップダウン一辺倒ではなく、データ分析や栄養管理など異質な能力・価値観を持つスタッフたちと柔軟にコミュニケーションを図りながら、最高の結果を出すことが求められます。そのため、今後はスポーツ界にもリーダーシップ教育、ガバナンス教育の機会が増えていくと思われます。

こうした動きとは別に、1990年以降の日本では海外移籍を志す選手たちが増えてきました。さらには、世界的に活躍した外国人選手と外国人コーチの日本移籍により、その凄さを見せつけられた日本の関係者は「もはや従来の練習だけでは世界で勝てない」との思いを抱き、改革の必要性を訴えるようになったのです。このように国際交流が盛んに行われ、異質な人や価値観に触れる機会が増えたことにより、日本スポーツ界には「変わりやすい」「変えやすい」条件が揃っていたのも事実です。ここは企業改革のステップと大きく異なる部分かもしれません。

最近、「努力は、夢中に勝てない」という言葉をよく聞きます。たしかに努力という言葉はどこか義務的で、「辛い・苦しい」という悲壮感が感じられます。しかし、いま世界で活躍するアスリートに共通しているのは、「夢中・本気」といった前向きな生き様であることが分かっています。そして、夢中になっている人は「探究心」をベースに、行動量と累積思考量が圧倒的であるにもかかわらず、常にそれを心の底から楽しんでいるように見えます。

私たちがこれに倣い、仕事にも趣味にもそれぞれ夢中になって、楽しみながら期待以上の成果を出していきたいものです。
(筆者は当会理事)